

英語音声学

英語教育教室・国際理解教育コース 池野修

1. 授業の内容

英語オーラル・コミュニケーション授業の知識ベースの一つである英語音声学について学ぶ。単なる音声学の知見の紹介ではなく、英語教育との関連性を重視し、オーラル・コミュニケーション授業の改善を意識した授業を目指す。

授業の目標として次の5点を設定した。このコースの終了までに、履修者は(1) 英語音声学についての専門的知識の基礎を学んでおり、音声現象（個々の音・リズム・音の変化・イントネーション etc.）について簡単に専門的な解説ができるようになっている、(2) 英語発音指導（e.g. 特殊カナを利用した発音指導、rhythm chants, English 575）についての様々なアイデアを学んでいる、(3) 自らの英語発音能力、英語音声表現力が向上している、(4) 英語リスニングのメカニズムについて理解し、その教授法（e.g. dictogloss, shadowing 各種）を学んでいる、(5) オリジナルな英語リスニング教材を作成し、それを発表するという体験を持っている。

授業では、(a) 音読トレーニング（以下を参照）、(b) ジグソー学習（割り当てられた学習内容を教え合うグループ活動）、(c) 発音&リスニングの様々な活動の実演とその意義・問題点・改善案についての考察、(d) 英語リスニング教材の作成と発表、(e) 講義など様々な活動を行った。

この内、音読トレーニングは、授業の最初の15分から20分を使って次のように実施した。(1) 対象となるパッセージについて、教師が音読のポイントを解説する、(2) 受講生が各自2回練習した後自らの音読をテープに録音する、(3) 録音された音読を聞き、うまく出来ている点や問題点を自分で分析する（学期が進むにつれて、他の受講生の朗読テープを受け取って分析するという相互評価も取り入れた）、(4) 受講生は授業終了時にテープを提出し、教員が次週までにそれを聞いてコメントを書いて返却する。

なお、この授業は平成19年度前期に開講されたもので、受講生人数は14名であった。

2. 授業評価

2.1. 授業アンケート

授業を振り返る手がかりとするために、受講生に5つの質問からなるアンケートを実施した。このレポートでは、その中から、質問2「毎回の授業の最初の15～20分を使って『音読トレーニング』を行ないましたが、この活動はどうすればよりよいものになると思いますか。」及び質問4「あなたがこの『英語音声学』の授業担当者だとしたら、具体的に授業のどこをどのように変えますか。なぜですか。」という2つの質問に対する回答を取り上げ、(1) 音読トレーニング、(2) いわゆる「理論的」知識（音声学の基礎知識）の教授と実践的活動（e.g. 指導法の実演）の関係の2点に限定して、省察結果を提示することとする。

2.2. 音読トレーニングについて

音読トレーニングは、以下の感想が示すように、全体的に大変高い評価を受けた。

[1] 毎回のトレーニングによってとても音読力が向上したと思います。音読に対する先生のコメントが、詳細でまた肯定的な面を多く指摘してくれていたため、毎回コメントを読むのが楽しみでした。

[2] 感情を込めて読もうとすると、モデルの人が「なぜこのような言い方をしたか」が見えてくる。それが見えてくると、ポーズの取り方や息づかいまでが見えてくる。そこまでくるともはや単なる音読ではなく、声を使ったshowのようである。そのような不思議な感覚になれたこの授業に感謝したい。

この活動は、単なる英語発音練習としてではなく音声による表現力の向上をねらいとして行なったものであり、この意図が受講生にも理解されたことは [2] のコメント等にも現れている。

もちろん、音読トレーニング活動に問題がなかった訳ではない。あらためて明らかになった課題の1つは音読素材に関するものであり、次のコメントにも示されている。

[3] 題材があまり興味があるものではなかったの

で、もっと時事的なことや英語のワンシーンを
使ってみるなどしたらどうでしょうか。

[4] 音読の教材を中学校の教科書よりは少し難度
を上げた方がよいかも知れないと感じた。

音読トレーニングの題材の多くは中学校3年生の
英語教科書から採ったものであるが(ちなみに、
他にもドラマのセリフやスピーチも一部は入れ
ている)、これは(a)「英語音声学」が中等教育
の英語教員養成の一環として実施している授業
であり、教職において実際に音読する対象となる
パッセージを選んだ(中1~高3の真ん中を取っ
て中3)、(b)モデル音声データが手に入りやすか
ったという理由からである。しかしながら、大学
生には内容の知的レベル、音声的・言語的困難度
のレベルで適切とは言えない題材もあったのは
確かであろう。来年度に向けて題材の一部入れ替
えを検討したい。

改善への提案については、音読上のポイントの
説明方法に関する次のコメントが参考になった。

[5] いきなり説明に入るのではなく、一度読ませ
てからの方がここが間違っていたなどと気づ
けるので良いと思いました。

まず活動を一度経験した後に関連説明を与える
方が気づきが多くなる、というのは確かにそうで
あろう。来年度はこの案を採用して解説を行うよ
うにするつもりである。

その他、音読トレーニングの改善への提案の中
には、次のようなものも見られたが、[6] に対し
ては、90分授業の枠の中では、他の活動との兼ね
合いもあり時間的余裕がない、[7] に対しては、
テープ/CD/MD など多様な形で音声データを
準備するには時間と労力がかかりすぎるとい
う理由で、これらの提案を採用することは今のと
ころ考えていない。

[6] 個人の作業(及びその後の先生によるチェッ
ク)だけではなく、代表者を決め、全員の前で
デモンストレーションをさせて評価させる活
動を行なうようにすればよいのではないか。

[7] モデル朗読を学生に配布する際に、テープだ
けではなく、CD-RかMDなどを持参させてそ
れに音を録音するようにする。

2.3. いわゆる「理論的な知識の学習」と「実践的 な活動」の関係について

授業では、英語音声学の理論的な知識の学習と
実践的な活動(音読トレーニング、発音指導法の
体験、教材の作成演習)の両方を行なった。理論
的知識の学習においても、教師による講義を中心
とするのではなく、課題リーディングとその理解
のための study guide をあらかじめ渡しおき、
それらを用いた授業外課題を基に、受講生同士に
よる教え合いの形をとるジグソー学習(+教員に
よる確認の解説)を中心活動とした。このよう
に授業形態を工夫したつもりではあるが、次のコメ
ントに見られるように、この「理論学習」の魅力
や意義は、必ずしも全員に納得の行くものではな
かったのかも知れない。

[8] 音声学・音韻論の内容は、英語教員として理
解しなければならない内容ではありますが、正
直に言うと、実践的な音読練習やリスニング活
動体験の方が面白かったし、タメになりました。
もう少し、その比重を後者に傾ければよいと思
います。

[9] 「音声学」の内容と音読練習、リスニング教
材との関係がよく分かりませんでした。

一般的に、理論的知識の学習は実技の活動に比
べて静的で地味なものになりやすいため、より魅
力に欠けると判断される傾向がある。しかし少な
くとも、理論的知識を具体的な実践的場面と関連
づける様々な工夫を行うこと等を通して、その意
義がより受講生に感じられやすいようにしてい
きたいと考えている。

また、「英語音声学」と言っても、やはり英語
教員養成の一環として行なう訳であるから、「親
学問の知見を薄めて流す」というようなスタイル
ではなく、実践の改善に必要とされるものは何か
、より教育的関連性の高い情報は何かという観点
から、教える内容を今一度再構成する必要がある
と感じている。(これは「教科に関する科目」全
てに共通する課題と考えられる。)
「実践を多面的に、より深く理解し、また豊かに語る道具として
の理論的概念」「実践をうまく整理するための理論
的枠組み」「新たな実践を触発するための理論
的アイディア」という視点を大切に、習得対象と
して提示する専門的知識の中身を再検討するつ
もりである。